

## 第七講 エーリス戦争の原因と目的

### —スパルタ帝国主義が直面していた問題—

#### エーリス戦争の原因と目的

クセノフォンは怒り (*orgizomenoi*) が原因で、懲らしめること (*sophonisai*) が目的。

ペロポネソス戦争中の反スパルタ行動

リカース事件

戦勝祈願妨害

いずれもスパルタに脅威を及ぼすものではない

エーリスの港湾を確保しようという海上帝国建設と関連付ける見解もある

原因はレプレオンではないのか？というのもアーギスの遠征軍がエーリス領内に侵入するとレプレオンは離反しているし (*Xen. Hell. 3. 2. 25*)、エーリスへの要求事項の中にレプレオンやペリオイコイ諸都市の自治が含まれているからである (*Paus. 3. 8. 3*)。

直接の原因が史料からはよく分からない。

アテナイなどとの同盟にしろ、リカース事件にしろ、二十年も前の出来事だし、その時スパルタは平静にしていた。アーギスの犠牲奉納拒否は何時のことかは分からないが、ペロポネソス戦争が終わって五年は経っているのだから、それを戦争原因 (*Causus Belli*) とする訳にはいかない。ここから理由もなく、過去のエーリスの行動が気に入らないという不快感から一方的に戦争を始め、エーリスに多大な領土割譲を強要した、という印象を与えることとなる。

しかし、同時代人のクセノフォンはこの時、アジアにいて事情に精通していたわけではないだろうし、『ギリシア史』にこの部分の記述を行なったのはこの事件から何年もの後のことであり、記憶に頼っての回想に近いということを考えると、スパルタがエーリスに対して行動を起こさざるを得なかった原因が歴史の記述から脱落してしまっているのも不思議なことではない。

帝国を保持するスパルタがエーリスに対して「自由」をプロパガンダとして使い得たのは、エーリスがペロポネソス戦争後、「自由」を侵害する行動を取ったからだろうと推測できる。それは、ペロポネソス戦争の終了によってスパルタがレプレオンから守備隊を撤兵させ、その機会を利用してエーリスがレプレオンに対して何らかの行動を取ったからだろうと考えられる。

つまり、講和に際してスパルタがエーリスに突き付けた条件の中に原因が含まれていたということである。

Xen. *Hell.* 3. 2. 23:

[23] ἐκ τούτων οὖν πάντων ὀργιζομένοις ἔδοξε τοῖς ἐφόροις καὶ τῇ ἐκκλησίᾳ σωφρονίσαι αὐτούς. πέμπσαντες οὖν πρέσβεις εἰς Ἥλιν εἶπον ὅτι τοῖς τέλεσι τῶν Λακεδαιμονίων δίκαιον δοκοίη εἶναι ἀφιέναι αὐτούς τὰς περιοικίδας πόλεις αὐτονόμους. ἀποκριναμένων δὲ τῶν Ἡλείων ὅτι οὐ ποιήσοιεν ταῦτα, ἐπιληθίδας γὰρ ἔχουσιν τὰς πόλεις, φρουρὰν ἔφηναν οἱ ἔφοροι. ἄγων δὲ τὸ στράτευμα Ἄγις ἐνέβαλε διὰ τῆς Ἀχαΐας εἰς τὴν Ἡλείαν κατὰ Λάρισον.

「[23] これら全てのことで怒りに燃えていたので、監督官たちと民会によって彼らを懲らしめようと決定したのであった。エーリスに使節団を派遣して、ラケダイモン人の当局は彼らがペリオイコイの諸都市を自治都市として自由を与えることが正しいと考えていると、伝えたのであった。それらの諸都市は戦利品として獲得したので、そのようなことは行わないとエーリス人が返答したので、監督官団は軍を動員したのであった。それで遠征軍をアーギスは率いてアカイア人たちの領土を通りラリス川に沿ってエーリスへと侵攻したのであった。」

エーリス戦争の評価

スパルタ帝国主義を如実に示すものという説

戦後処理のスタイルはリュサンドロスのそれとは異なる。

デカルキア体制は強要されていない。

民主政は堅持。

エーリスの有力者との間のヘタイレイア関係は確認されない。

アテナイの内戦で取られた方針を踏襲

民主派との交渉。

亡命者の帰国受け入れを要求せず (Cartledge は帰国を強要したという)。

同盟分担金を要求せず。

ペリオイコイ都市の自治回復。

艦隊の放棄。

要地周壁の解体。

オリュンピア主宰権の容認。

Xen. *Hell.* 3. 2. 30-31:

[30] τοῦ δ' ἐπιόντος θέρους πέμπσας Θρασυδαῖος εἰς Λακεδαιμόνα συνεχώρησε Φέας τε τὸ τεῖχος περιελεῖν καὶ Κυλλήνης καὶ τὰς Τριφυλίδας πόλεις ἀφεῖναι Φριζαν καὶ Ἐπιτάλιον καὶ Λετρίνους καὶ Ἀμφιδόλους καὶ Μαργανέας, πρὸς δὲ ταύταις καὶ Ἀκρωρείους καὶ Λασιῶνα τὸν ὑπ' Ἀρκάδων ἀντιλεγόμενον. Ἥπειον μέντοι τὴν μεταξὺ πόλιν Ἡραίας καὶ Μακίστου ἤξιουν οἱ Ἥλειοι ἔχειν: πριασθαι γὰρ ἔφησαν τὴν χώραν ἅπασαν παρὰ τῶν τότε ἐχόντων τὴν πόλιν τριάκοντα ταλάντων, καὶ τὸ ἀργύριον δεδωκέναι. [31] οἱ δὲ Λακεδαιμόνιοι γνόντες μηδὲν δικαιότερον εἶναι βία πριαμένους ἢ βία ἀφελομένους παρὰ τῶν ἡττόνων λαμβάνειν, ἀφιέναι καὶ ταύτην ἠνάγκασαν: τοῦ μέντοι προεστάναι τοῦ Διὸς τοῦ Ὀλυμπίου ἱεροῦ, καίπερ οὐκ ἀρχαίου Ἥλειος ὄντος, οὐκ ἀπήλασαν αὐτούς, νομίζοντες τοὺς ἀντιποιουμένους χωρίτας εἶναι καὶ οὐχ ἱκανοὺς προεστάναι. τούτων δὲ συγχωρηθέντων εἰρήνη τε γίγνεται καὶ συμμαχία Ἥλειων πρὸς Λακεδαιμονίους. καὶ οὕτω μὲν δὴ ὁ Λακεδαιμονίων καὶ Ἥλειων πόλεμος ἔληξε.

「[30] 夏になるとトラシュダイオスは（使者を）派遣してペアとキュレネの周壁を撤去し、トリピュリアの諸都市、プリクサ、エピタリオン、レトリノイ、アンピドリオイ、マルガナ、さらにはアクロレイアや、アルカディア人が（エーリス人）に対して権利を主張しているラシオンを自由にすることに同意した。しかしエーリス人はヘライアとマキストスの間にある都市エーペイオンを領有することを要求したのである。というのは昔、その都市の所有者たちから 30 タラントンの金を支払ってその地方全体を獲得したからであると言いつた。[31] しかしラケダイモン人は暴力によるのと同じように強制的に弱者から購入して手に入れることは正しいことではないと考えており、それを放棄するよう説得したのである。しかしオリュンピアのゼウスの神域を管理することについては、古くはエーリス人に所属していなかったにもかかわらず、彼らを排除せず、返還を要求する者たちは田舎者であり管理する能力がないと考えていた。これらのことが受け入れられるとエーリス人とラケダイモン人の講和条約と同盟が成立した。このようにしてラケダイモン人とエーリス人の戦争は終わったのである。」

## 結論

### 修正された帝国主義

市民団の弱体化に対応→出来るだけ対外的コミットを避ける。

ネオダモデイス・ヒュポメイオネスの増加とその活用→

国外・遠隔地への派遣。

ギリシア世界におけるスパルタのヘゲモニーの堅持。

対ペルシア戦の継続。

有力者間のヘタイレイア関係育成とヘタイロス支援の欠如(クセニア関係は見られるし、エーリス人亡命者との協同は見られるが)。

寡頭政を強要せず。

エーリスの政情に合致した政策の展開。

ハルモステスや駐留軍を設置せず (Xen. *Hell.* 3. 2. 29 : 戦争中のエピタリオンを除いて)。

対立し合う諸勢力の温存（アテナイの民主派とエレウシスの寡頭派のように）。

コイレー・エーリスはエーリスの領土。

ペリオイコイ諸都市は自立。

少なくともコリントス戦争勃発まではスパルタの外交スタイルとして継続。

アーギス王の病死

若いアゲシラオス王の即位。スパルタ国内より、対ペルシア戦に関心。ギリシア人の解放をプロパガンダとして利用。国内はパウサニアス王に委ねられる。

コリントス・テーバイの反発（アテナイ民主派を支援）。

アテナイはスパルタへの協力を堅持。

- P. Cartledge (1987): *Agesilaos and the Crisis of Sparta*, Baltimore.
- E. David (1986): *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): Internal Problems and their Impact on contemporary Greek Consciousness*, Salem.
- C. Falkner (1996): "Sparta and the Elean War, ca 401/400 B. C.: Revenge or Imperialism?", *Phoenix* 50, pp.17-25.
- C. D. Hamilton (1991): *Agesilaus and the Failure of Spartan Hegemony*, Ithaca and London.
- Roy, J. (1997): "The Perioikoi of Elis", in *The Polis as an Urban Centre and as a Political Community*, ed. M. H. Hansen, Acts of the Copenhagen Polis Centre 4, Copenhagen, 1997. pp.282-320.
- Do (1998): "Thucydides 5. 49. 1- 50. 4: The Quarrel between Elis and Sparta in 420 B. C., and Elis' Exploitation Olympia", *Klio* 80, pp.360-68.
- Do (2002): "The Synoikism of Elis", in Nielsen, T. H.. *Even More Studies in the Ancient Greek Polis*. Stuttgart, pp. 249-264.

- Do (2004): “Elis”, in *An Inventory of archaic and classical Poleis*, eds. M. H. Hansen and Th. H. Nielsen, Oxford, pp.489-504.
- 中井義明 (1978): 「エーリス戦争とスパルタ」『文化史学』34、pp.23-34.